**（注）大臣所轄学校法人等に該当する知事所轄学校法人においては、**

**大臣所轄学校法人向けの寄附行為作成例を参照すること。**

**（注）この作成例は、一般的な例であるから学校法人のそれぞれの特殊事情を考慮して、画一的に取り扱うことのないように留意するものとする。**

寄　附　行　為

学校法人●●学園寄附行為

第１章　総則

（名称）

第１条　この法人は、学校法人●●学園と称する。

（事務所）

第２条　この法人は、事務所を香川県●●市（●●郡）●●町●●番地に置く。

第２章　目的及び事業

（目的）

第３条　この法人は、教育基本法及び学校教育法に従い、学校教育を行い、●●な人材を育成することを目的とする。

（設置する学校）

第４条　この法人は、前条の目的を達成するため、次に掲げる学校を設置する。

●●学校　●●課程　●●科

（収益事業）

第５条　この法人は、その収益を学校の経営に充てるため、次に掲げる収益事業を行う。

　(1)　書籍・文房具小売業

　(2)　各種食料品小売業

　(3)　●●業

☞　収益事業を行わない場合には、規定しない。

第３章　機関の設置

（役員及び評議員の設置）

例１～２共通

☞　理事の定数は５人以上であること。

☞　監事の定数は２人以上であること。

☞　評議員の定数は理事の定数を超えていること。

（例１：各機関の定数を●名と規定する場合）

第６条　この法人に、次の役員を置く。

　(1)　理事　●名

　(2)　監事　●名

２　この法人に、評議員●名を置く。

（例２：各機関の定数を●名以上●名以内と規定する場合）

第６条　この法人に、次の役員を置く。

　(1)　理事　●名以上●名以内

　(2)　監事　●名以上●名以内

２　この法人に、評議員●名以上●名以内を置く。

３　評議員の実数は、理事の実数を超える数でなければならない。

（理事選任機関）

例１～３共通

☞　理事選任機関の構成及び運営の具体的内容の決定は、学校法人の判断に委ねられている。ただし、理事選任機関の構成及び運営、監事からの報告の方法等は、寄附行為に必ず規定しなければならないことに留意すること。

☞　理事選任機関の構成員について（構成員の属性、人数及び任期のほか、構成員の選任方法など）明記されていること。

☞　理事会・評議員会以外の理事選任機関については、運営方法（招集や決議に係る事項など）が明記されていること（運営方法の詳細について理事選任機関運営規程等の下位規則に委任することも可能。また、必要な事項が寄附行為で定められている場合には、下位規則を設ける必要はない。）。

☞　理事選任機関が評議員会・理事会の場合は、理事選任機関の運営方法は評議員会・理事会のそれぞれの運営方法に則って行うこととなる（特に、理事選任機関が評議員会の場合は、決議要件の加重が不可であることなどに留意が必要。）。

☞　理事選任機関を理事会のみにすることも不可能ではないが、今回の制度改正の趣旨を踏まえて適切に判断すること。

（例１：評議員会を理事選任機関とする場合）

第７条　この法人の理事選任機関は、評議員会とする。

２　理事選任機関の構成員は、全ての評議員とする。

３　監事は、理事選任機関に対し必要な報告を行おうとするときは、理事長に対し、理事選任機関の招集を請求することができる。この場合において、理事長は、理事選任機関を招集しなければならない。

（例２：独立した理事選任機関を置く場合）

第７条　この法人の理事選任機関の構成員は、理事●名、評議員●名、学外有識者●名とする。

２　理事選任機関の構成員は、理事選任機関選考会議の決議によって選任する。

３　理事選任機関の構成員の任期は、●年とする。４　理事選任機関は、当該理事選任機関の決議によって定められた者が招集する。

５　理事選任機関が理事を選任するときは、理事長に対し、評議員会の招集を求め、あらかじめ、評議員会の意見を聴かなければならない。

６　理事選任機関は、前項の評議員会の意見を十分に参酌し、理事を選任しなければならない。

７　理事選任機関の決議は、理事選任機関の構成員の過半数が出席し、その過半数をもって行う。

８　監事又は評議員会は、理事選任機関に対し必要な報告又は求めを行おうとするときは、理事選任機関招集権者（第４項に規定する者をいう。以下この項及び第29条第１項第５号において同じ。）に対し、理事選任機関の招集を請求することができる。この場合において、理事選任機関招集権者は、理事選任機関を招集しなければならない。

９　理事選任機関の議事録その他理事選任機関の運営に関し必要な事項は、理事選任機関運営規程で定める。

（５項）

☞　理事長以外の理事を評議員会の招集担当理事とする場合には、当該理事に対して招集を求めることとされていること。

（７項）

☞　理事選任機関の決議要件について、加重することも可能。

（例３：理事会、評議員会及び第三者機関を理事選任機関とする場合）

第７条　この法人に、次の理事選任機関を置く。

(1)　理事会

(2)　評議員会

(3)　外部理事選任委員会

２　理事選任機関の構成員は、次の各号に掲げる者とする。

(1)　理事会　全ての理事

(2)　評議員会　全ての評議員

(3)　外部理事選任委員会　学外有識者　●名３　外部理事選任委員会の構成員は、外部理事選任委員選考会議の決議によって選任する。

４　外部理事選任委員会の構成員の任期は、●年とする。

５　外部理事選任委員会は、外部理事選任委員会の決議によって定められた者が招集する。

６　評議員会以外の理事選任機関が理事を選任するときは、理事長に対し、評議員会の招集を求め、あらかじめ、評議員会の意見を聴かなければならない。

７　評議員会以外の理事選任機関は、前項の評議員会の意見を十分に参酌し、理事を選任しなければならない。

８　外部理事選任委員会の決議は、外部理事選任委員会の構成員の過半数が出席し、その過半数をもって行う。

９　監事又は評議員会は、理事選任機関に対し必要な報告又は求めを行おうとするときは、理事選任機関招集権者（理事会又は評議員会にあっては理事長をいい、外部理事選任委員会にあっては第５項に規定する者をいう。以下この項及び第29条第１項第５号において同じ。）に対し、理事選任機関の招集を請求することができる。この場合において、理事選任機関招集権者は、理事選任機関を招集しなければならない。

10　外部理事選任委員会の議事録その他外部理事選任委員会の運営に関し必要な事項は、外部理事選任委員会運営規程で定める。

（６項）

☞　理事長以外の理事を評議員会の招集担当理事とする場合には、当該理事に対して招集を求めることとされていること。

（８項）

☞　評議員会を除く理事選任機関の決議要件について、加重することも可能。

第４章　理事会及び理事

第１節　理事の選任及び解任等

（理事の選任）

例１～３共通

☞　監事や評議員を兼ねることとなっていないこと。

☞　校長である理事が１人以上は含まれる構成になっていること。

☞　教学における役職者（校長含む。）などについて、理事選任機関の選任行為無しで自動的に理事となる仕組みを設けることになっていないこと。

☞　その職を退いた後も、理事の職を失わないとすることも可能。ただし、校長である理事が１人もいなくなることは、私立学校法第31条第４項第１号に違反する。

☞　補欠の理事としてあらかじめ選任した者が理事に就任することとなるタイミングについて、理事の総数が５人を下回ることとなるとき以外としたい場合には、寄附行為に具体的な人数（５人を超える人数）を規定しておく必要あり。

（例１：評議員会を理事選任機関とする場合）

第８条　理事は、次の各号に掲げる者とする。

　(1)　校長のうちから評議員会において選任した者　●名

　(2)　前号に規定するもののほか、評議員会において選任した者　●名

２　前項第１号に定める理事は、その職を退いたときは理事の職を失うものとする。

３　理事選任機関は、理事の総数が●名を下回ることとなるときに備えて、補欠の理事を選任することができる。

（例２：独立した理事選任機関を置く場合）

第８条　理事は、次の各号に掲げる者とする。

　(1)　校長のうちから理事選任機関において選任した者　●名

　(2)　前号に規定するもののほか、理事選任機関において選任した者　●名

２　前項第１号に定める理事は、その職を退いたときは理事の職を失うものとする。

３　理事選任機関は、理事の総数が●名を下回ることとなるときに備えて、補欠の理事を選任することができる。

（例３：理事会、評議員会及び第三者機関を理事選任機関とする場合）

第８条　理事は、次の各号に掲げる者とする。

　(1)　校長のうちから理事会において選任した者　●名

　(2)　評議員会において選任した者　●名

（3） 外部理事選任委員会において選任した者　●名

２　前項第１号に定める理事は、その職を退いたときは理事の職を失うものとする。

３　理事選任機関は、それぞれ、理事の数が第１項各号に掲げる数を下回ることとなるときに備えて、補欠の理事を選任することができる。

（理事の資格及び構成）

第９条　理事の選任に当たっては、私立学校法第31条に規定する資格及び構成に関する要件を遵守しなければならない。

（理事の任期）

第10条　理事の任期は、選任後４年以内に終了する会計年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時までとする。ただし、任期の満了前に退任した理事の補欠として選任された理事の任期は、前任者の残任期間とすることができる。

２　理事は、再任されることができる。

（１項）

☞　選任後、４年以内の期間であること。

☞「選任後●年以内に終了する会計年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時まで」となっていること。「●年間」などの不変期間とすることは不可。

☞　理事の任期を理事選任機関ごとなどに分けてそれぞれ定めることも可能。ただし理事選任機関ごとなどに異なる任期となることについて合理的な理由があることや、監事・評議員の任期が、最も任期が長い理事の任期以上となっている必要がある。

☞　補欠の理事の任期を前任者の残任期間とする場合には、寄附行為にその旨を規定しておく必要あり。

（理事の解任及び退任）

例１～２共通

☞　当該理事を選任した理事選任機関が解任することとなっていること。

☞　理事の解任事由として、法律で規定されたもの以外の事由による解任を可能とする場合には、寄附行為にその旨を規定しておく必要あり。

☞「２週間」、「30日以内」との期限は、法律で規定されている事項であるため、変更することは不可能。

（例１：理事選任機関が評議員会のみの場合）

第11条　理事が次の各号のいずれかに該当するときは、当該理事を選任した理事選任機関の決議によって解任することができる。

(1)　職務上の義務に違反し、又は職務を怠ったとき

(2)　心身の故障のため、職務の執行に支障があり、又はこれに堪えないとき

(3)　理事としてふさわしくない非行があったとき

２　理事が前項各号のいずれかに該当し、理事の職務の執行に関し不正の行為又は法令若しくはこの寄附行為に違反する重大な事実があったにもかかわらず、当該理事の解任を求める旨の議案が評議員会において否決されたときは、評議員は、当該議案が否決された日から30日以内に、訴えをもって当該理事の解任を請求することができる。

３　理事は次の事由によって退任する。

(1)　任期の満了

(2)　辞任

(3)　死亡

（例２：例１以外の場合）

第11条　理事が次の各号のいずれかに該当するときは、当該理事を選任した理事選任機関の決議によって解任することができる。

(1)　職務上の義務に違反し、又は職務を怠ったとき

(2)　心身の故障のため、職務の執行に支障があり、又はこれに堪えないとき

(3)　理事としてふさわしくない非行があったとき

２　理事が前項各号のいずれかに該当するときは、評議員会は、当該理事を選任した理事選任機関に対し、当該理事の解任を求めることができる。

３　前項の場合において、理事の職務の執行に関し不正の行為又は法令若しくはこの寄附行為に違反する重大な事実があったにもかかわらず、当該理事の解任を求める旨の議案が評議員会において否決されたとき、又は当該理事の解任を求める旨の評議員会の決議があった日から２週間以内に理事選任機関による解任がされなかったときは、評議員は、当該議案が否決された日又は当該決議があった日から２週間を経過した日から30日以内に、訴えをもって当該理事の解任を請求することができる。

４　理事は次の事由によって退任する。

(1)　任期の満了

(2)　辞任

(3)　死亡

（理事に欠員を生じた場合の措置）

第12条　理事は、第６条に定める定数を下回ることとなったときは、任期の満了又は辞任により退任した後も、後任の理事が選任されるまでは、なお理事としての権利義務を有する。

２　理事のうち、その定数の５分の１を超えるものが欠けたときは、１月以内に補充しなければならない。

第２節 理事会及び理事の職務等

（理事会の構成）

第13条　理事会は、全ての理事で組織する。

（理事会の権限）

第14条　理事会は、この法人の業務を決し、理事の職務の執行を監督する。

☞　理事会の職務として、法律で規定されたもの以外を行うこととする場合には、　　寄附行為にその旨を規定しておく必要あり。

（理事の職務）

例１～３共通（２項）

☞　理事長は、理事のうちから理事会が選定することとなっていること。

☞　理事長は、理事会が解職することとなっていること。

☞　理事長を、理事会以外が選定・解職すること（評議員会が選定する、学内選挙で選定する、学長の充て職とするなど）は不可能。

☞　評議員会の意見や学内選挙の結果を尊重して、理事会が理事長を選定する旨を定めることは可能。

☞　理事長の任期を設定することは可能。

☞　決議要件を加重することは可能。

例１（８項）、例２（７項）、例３（６項）

☞　理事長に事故があるときに、理事長の内部的な職務を行う者をあらかじめ定めておく場合には、例えばこのように規定すること。ただし、この規定により新たに代表権を付与することはできないため、代表権の行使については、寄附行為で定められた範囲内で代表業執行理事が行う必要があることに留意すること。

（例１：代表業務執行理事と業務執行理事を置く場合）

第15条　理事は、理事会を構成し、法令及びこの寄附行為で定めるところにより、職務を執行する。

２　理事のうち１名を理事長とし、理事会の決議によって選定する。理事長を解職するときも、同様とする。

３　理事（理事長を除く。）のうち●名以内を代表業務執行理事とし、理事会の決議によって選定する。代表業務執行理事を解職するときも、同様とする。

４　理事（理事長及び代表業務執行理事を除く。）のうち●名以内を業務執行理事とし、理事会の決議によって選定する。業務執行理事を解職するときも、同様とする。

５　理事長は、この法人を代表し、その業務を総理する。

６　代表業務執行理事は、この法人を代表し、理事会の定めるところにより、理事長を補佐してこの法人の業務を掌理する。

７　業務執行理事は、理事会の定めるところにより、理事長を補佐してこの法人の業務を掌理する。

８　理事長に事故があるときは、あらかじめ理事会において定めた順位に従い、代表業務執行理事又は業務執行理事がその職務（理事長に事故があるときに当該職務を行う者が別に定められている職務を除く。）を行う。

（３項）

☞　代表業務執行理事は、理事のうちから理事会が選定することとなっていること。

☞　代表業務執行理事は、理事会が解職することとなっていること。

☞　決議要件を加重することは可能。

☞　代表業務執行理事について、副理事長等の名称を用いることは可能。ただし、法律上の名称と当該名称がどのような関係にあるのかを明らかにするために、例えば以下のように規定すること。

　　３ 理事（理事長を除く。）のうち●名以内を副理事長とし、理事会の決議によって選定する。副理事長を解職するときも、同様とする。

４ 副理事長をもって私立学校法第37条第３項の代表業務執行理事とする。

（４項）

☞　業務執行理事は、理事のうちから理事会が選定することとなっていること。

☞　業務執行理事は、理事会が解職することとなっていること。

☞　決議要件を加重することは可能。

☞　業務執行理事について、常任理事等の名称を用いることは可能。ただし、法律上の名称と当該名称がどのような関係にあるのかを明らかにするために、例えば以下のように規定すること。

　　４ 理事（理事長及び代表業務執行理事を除く。）のうち●名以内を常任理事とし理事会の決議によって選定する。常任理事を解職するときも、同様とする。

５ 常任理事をもって私立学校法第37条第４項の業務執行理事とする。

（６項）

☞　代表業務執行理事の代表権に制限を加える場合には、その旨を寄附行為において定める必要がある。

☞　代表業務執行理事が行う業務の範囲は、理事会で定めることとなる。

（７項）

☞　業務執行理事が行う業務の範囲は、理事会で定めることとなる。

（例２：代表業務執行理事のみを置く場合）

第15条　理事は、理事会を構成し、法令及びこの寄附行為で定めるところにより、職務を執行する。

２　理事のうち１名を理事長とし、理事会の決議によって選定する。理事長を解職するときも、同様とする。

３　理事（理事長を除く。）のうち●名以内を代表業務執行理事とし、理事会の決議によって選定する。代表業務執行理事を解職するときも、同様とする。

４　理事のうち●名以内を業務執行理事とすることができる。業務執行理事は、理事会の決議によって選定する。業務執行理事を解職するときも、同様とする。

５　理事長は、この法人を代表し、その業務を総理する。

６　代表業務執行理事は、この法人を代表し、理事会の定めるところにより、理事長を補佐してこの法人の業務を掌理する。

７　業務執行理事は、理事会の定めるところにより、理事長を補佐してこの法人の業務を掌理する。

８　理事長に事故があるときは、あらかじめ理事会において定めた順位に従い、代表業務執行理事又は業務執行理事がその職務（理事長に事故があるときに当該職務を行う者が別に定められている職務を除く。）を行う。

（３項）

☞　代表業務執行理事は、理事のうちから理事会が選定することとなっていること。

☞　代表業務執行理事は、理事会が解職することとなっていること。

☞　決議要件を加重することは可能。

☞　代表業務執行理事について、副理事長等の名称を用いることは可能。ただし、法律上の名称と当該名称がどのような関係にあるのかを明らかにするために、例えば以下のように規定すること。

　　３ 理事（理事長を除く。）のうち○名以内を副理事長とし、理事会の決議によって選定する。副理事長を解職するときも、同様とする。

４ 副理事長をもって私立学校法第37条第３項の代表業務執行理事とする。

（４項）

☞　現在は業務執行理事を置かないものの、将来的に置く可能性がある場合には、このように規定することも考えられる。

（６項）

☞　代表業務執行理事の代表権に制限を加える場合には、その旨を寄附行為において定める必要がある。

☞　代表業務執行理事が行う業務の範囲は、理事会で定めることとなる。

（例３：代表業務執行理事も業務執行理事も置かない場合）

第15条　理事は、理事会を構成し、法令及びこの寄附行為で定めるところにより、職務を執行する。

２　理事のうち１名を理事長とし、理事会の決議によって選定する。理事長を解職するときも、同様とする。

３　理事のうち●名以内を代表業務執行理事とすることができる。代表業務執行理事は、理事会の決議によって選定する。代表業務執行理事を解職するときも、同様とする。

４　理事のうち●名以内を業務執行理事とすることができる。業務執行理事は、理事会の決議によって選定する。業務執行理事を解職するときも、同様とする。

５　理事長は、この法人を代表し、その業務を総理する。

６　代表業務執行理事は、この法人を代表し、理事会の定めるところにより、理事長を補佐してこの法人の業務を掌理する。

７　業務執行理事は、理事会の定めるところにより、理事長を補佐してこの法人の業務を掌理する。

８　理事長に事故があるときは、あらかじめ理事会において定めた順位に従い、代表業務執行理事又は業務執行理事がその職務（理事長に事故があるときに当該職務を行う者が別に定められている職務を除く。）を行う。

（３項・６項）

☞　理事長に事故があるときに理事長以外の者が代表権を行使することができるようにするためには、代表業務執行理事を置くことができるようにしておく必要がある。

（４項・７項）

☞　現在は業務執行理事を置かないものの、将来的に置く可能性がある場合には、このように規定することも考えられる。

（代表権の制限）

第16条　理事長 及び代表業務執行理事 以外の理事は、この法人の業務について、この法人を代表しない。

☞　代表業務執行理事を置かない場合には、〔 〕内は規定しない。

（理事の報告義務）

第17条　理事長 、代表業務執行理事及び業務執行理事 は、毎会計年度に４月を超える間隔で２回以上、自己の職務の執行の状況を理事会に報告しなければならない。

☞　代表業務執行理事及び業務執行理事を置かない場合には、〔 〕内は規定しない。

☞　報告の時期を具体的に規定（年２回報告する場合においては、例えば、３月、９月など）することも可能。

☞　報告の頻度を「３月に１回以上」などと規定することも可能。

第３節 理事会の運営

（招集）

第18条　理事会は、理事長が招集する。

２　理事長が欠けたとき又は理事長に事故があるときは、各理事が理事会を招集する。

３　理事長以外の理事は、理事長に対し、会議の目的である事項を示して、理事会の招集を請求することができる。

４　理事長が、前項の請求のあった日から５日以内に、その請求の日から２週間以内の日を理事会の日とする理事会の招集の通知を発しない場合には、招集を請求した理事は理事会を招集することができる。

５　理事会を招集するには、各理事及び各監事に対して、会議の日時及び場所並びに会議の目的である事項を書面又は電磁的方法により通知しなければならない。

６　前項の通知は、会議の１週間前までに発しなければならない。ただし、緊急を要する場合はこの限りではない。

７　前２項の規定にかかわらず、理事会は、理事及び監事の全員の同意があるときは、招集の手続を経ることなく開催することができる。

（１項・２項）

☞　法律では原則として「各理事が招集する」こととされており、理事会招集担当の理事を定める場合には、寄附行為にその旨を規定しておく必要あり。

☞　理事長以外の理事を招集担当権者とすることも可能。

☞　理事及び第29条第２項の場合における監事以外の者が理事会を招集する仕組みを設けることは不可能。

☞　理事会の書面開催は不可能。

☞　理事会のオンライン開催は可能。

（４項）

☞　「５日以内」、「２週間以内」との期限を変更することは不可能。

（６項）

☞　招集通知の発出期限は、１週間より短縮することも可能。

（運営）

第19条　理事会に議長を置き、理事長をもって充てる。

２　前条第２項及び第４項並びに第29条第２項の規定に基づき理事会を招集した場合における理事会の議長は、出席理事の互選によって定める。

（１項）

☞　理事長以外の理事を議長とすることも可能。

（決議）

第20条　理事会の決議は、法令及びこの寄附行為に別段の定めがある場合を除くほか、決議について特別の利害関係を有する理事を除く理事の過半数が出席し、その過半数をもって行う。

２　前項の規定にかかわらず、次の決議は、議決に加わることができる理事の数の３分の２以上に当たる多数をもって行わなければならない。

　(1)　この寄附行為の変更

　(2)　予算及び事業計画の作成又は変更

(3)　基本財産の処分

(4)　借入金（当該会計年度内の収入をもって償還する一時の借入金を除く。）その他予算外の新たな義務の負担又は権利の放棄

(5)　残余財産の帰属者の決定

(6)　収益を目的とする事業に関する重要な事項

３　前２項の規定にかかわらず、次の決議は、理事の総数の３分の２以上に当たる多数をもって行わなければならない。

　(1)　私立学校法第109条第１項第１号に定める事由による解散

　(2)　この法人の合併４　理事は、書面又は電磁的方法により理事会の議決に加わることができる。

（１項）

☞　普通決議の要件を加重することも可能。

☞「可否同数の場合は、議長の決するところによる」旨の規定は適当ではない。

（２項）

☞　３分の２を上回る割合とすることも可能。

☞　第２号から第６号に規定する事項を特別決議としないことも可能。

☞　第２号から第６号に規定する事項については、各学校法人の判断で、第３項に規定することも可能。

☞　収益事業を行わない場合には、第６号は規定しない。

（３項）

☞　３分の２を上回る割合とすることも可能。

（４項）

☞　書面やメール等による意思表示を認める場合には、寄附行為にその旨を規定しておく必要あり。書面開催は不可。

（業務の決定の委任）第21条　法令及びこの寄附行為の規定により理事会において決定しなければならない事項以外

　　の決定であって、あらかじめ理事会において定めたものについては、理事会において指名した理事に委任することができる。

（議事録）第22条　理事会の議事については、法令で定めるところにより、議事録を作成しなければなら

ない。

２　議事録には、出席した理事及び監事が署名（電磁的記録により作成される議事録にあっては、電子署名。第47条第２項において同じ。）又は記名押印し、理事会の日から10年間、これを事務所に備えて置かなければならない。

（２項）

☞　議事録の署名担当者を定め、以下のように規定することも可能。

２ 議事録には、議長、出席した理事のうちから互選された理事２人以上及び出席した監事が署名（電磁的記録により作成される議事録にあっては、電子署名。　第47条第２項において同じ。）又は記名押印し、理事会の日から10年間、これを事務所に備えて置かなければならない。

第５章　監事

　　 第１節　選任及び解任等

（監事の選任）

第23条　監事は、評議員会の決議によって選任する。

２　前項の選任に当たっては、監事の独立性を確保し、かつ、利益相反を適切に防止することができる者を選任するものとする。

３　評議員会は、監事の総数が●名を下回ることとなるときに備えて、補欠の監事を選任することができる。

☞　評議員会が選任することとなっていること。

☞　理事、評議員、職員（教員を含む。）、子法人の役員（監事や監査役等を除く。）、　子法人の職員を兼ねることとなっていないこと。

☞　補欠の監事としてあらかじめ選任した者が監事に就任することとなるタイミングについて、監事の総数が２人を下回ることとなるとき以外としたい場合には、　　寄附行為に具体的な人数（２人を超える人数）を規定しておく必要あり。

（監事の資格）

第24条　監事の選任に当たっては、私立学校法第31条第３項及び第６項並びに第46条に規定する資格に関する要件を遵守しなければならない。

（監事の任期）

第25条　監事の任期は、選任後６年以内に終了する会計年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時までとする。ただし、任期の満了前に退任した監事の補欠として選任された監事の任期は、前任者の残任期間とすることができる。

２　監事は、再任されることができる。

（１項）

☞　選任後、６年以内の期間であること。

☞「選任後●年以内に終了する会計年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時まで」となっていること。「●年間」などの不変期間とすることは不可。

☞「●年」は理事の任期について寄附行為に規定された期間以上であること。

☞　補欠の監事の任期を前任者の残任期間とする場合には、寄附行為にその旨を規定しておく必要あり。

（監事の解任及び退任）

第26条　監事が次の各号のいずれかに該当するときは、評議員会の決議によって解任することができる。

　(1)　職務上の義務に違反し、又は職務を怠ったとき(2) 心身の故障のため、職務の執行に支障があり、又はこれに堪えないとき

(3) 監事としてふさわしくない非行があったとき

２　監事の職務の執行に関し不正の行為又は法令若しくはこの寄附行為に違反する重大な事実があったにもかかわらず、当該監事を解任する旨の議案が評議員会において否決されたときは、評議員は、当該評議員会の日から30日以内に、訴えをもって当該監事の解任を請求することができる。

３　監事は次の事由によって退任する。

(1)　任期の満了

(2)　辞任

(3)　死亡

（１項）

☞　評議員会が解任することとなっていること。

☞　監事の解任事由として、法律で規定されたもの以外の事由による解任を可能とする場合には、寄附行為にその旨を規定しておく必要あり。

（２項）

☞「30日以内」の期限は、法律で規定されている事項であるため、変更することは不可能。

（監事の選任若しくは解任又は辞任に関する手続）

第27条　理事は、監事の選任に関する議案を評議員会に提出するには、監事の過半数の同意を得なければならない。

２　監事は、理事に対し、監事の選任を評議員会の会議の目的とすること又は監事の選任に関する議案を評議員会に提出することを請求することができる。

３　監事は、評議員会において、監事の選任若しくは解任又は辞任について意見を述べることができる。

４　監事を辞任した者は、辞任後最初に招集される評議員会に出席して、辞任した旨及びその理由を述べることができる。

５　理事は、前項の者に対し、同項の評議員会を招集する旨並びにその日時及び場所を通知しなければならない。

（監事に欠員を生じた場合の措置）

第28条　監事は、第６条に定める定数を下回ることとなったときは、任期の満了又は辞任により退任した後も、後任の監事が選任されるまでは、なお、監事としての権利義務を有する。

２　監事のうち、その定数の２分の１を超えるものが欠けたときは、１月以内に補充しなければならない。

第２節 職務等

（監事の職務）第29条　監事は、次の各号に掲げる職務を行う。

(1)　この法人の業務及び財産の状況並びに理事の職務の執行の状況を監査すること。

　(2)　この法人の業務及び財産の状況並びに理事の職務の執行の状況について、毎会計年度、監査報告を作成し、当該会計年度終了後３月以内に理事会及び評議員会に提出すること。

　(3)　理事会及び評議員会に出席して意見を述べること。

　(4)　この法人の業務若しくは財産又は理事の職務の執行の状況に関し不正の行為又は法令若しくは寄附行為に違反する重大な事実があることを発見したとき又は不正の行為がなされ、若しくは法令若しくは寄附行為の重大な違反が生ずるおそれがあると認めるときは、これを理事会及び評議員会並びに香川県知事（当該報告が理事の業務の執行に関するものであるときは、理事選任機関を含む。）に報告すること。

(5)　前号の報告をするために必要があるときは、理事長〔又は理事選任機関招集権者〕に対して理事会及び評議員会又は理事選任機関の招集を請求すること。

(6)　前各号に掲げるもののほか、法令又はこの寄附行為により監事が行うこととされた職務

２　前項第５号の請求があった日から５日以内に、その請求があった日から２週間以内の日を理事会又は評議員会の日とする理事会又は評議員会の招集の通知が発せられない場合には、その請求をした監事は、理事会又は評議員会を招集することができる。理事選任機関の招集を請求した場合も、同様とする。

（１項２号）

☞　改正後の私立学校法第103条第２項において、毎会計年度終了後３月以内に計算書類等を作成しなければならないとされていることから、「３月以内」としているが、各学校法人の判断で、より短い期間とすることも可能。

（１項５号）

☞　理事会及び評議員会の招集担当理事を理事長以外の理事にしている場合には、当該理事に対して請求することとされていること。

（２項）

☞　「５日以内」、「２週間以内」との期限は、法律で規定されている事項であるため、変更することは不可能。

（調査権限等）

第30条　監事は、いつでも、理事及び職員に対して事業の報告を求め、又はこの法人の業務及び財産の状況の調査をすることができる。

２　監事は、その職務を行うため必要があるときは、この法人の子法人に対して事業の報告を求め、又はその子法人の業務及び財産の状況の調査をすることができる。

３　監事は、理事が評議員会に提出しようとする議案、書類その他私立学校法施行規則で定めるものを調査しなければならない。この場合において、法令若しくはこの寄附行為に違反し、又は著しく不当な事項があると認めるときは、その調査の結果を評議員会に報告しなければならない。

（２項）

☞　子法人がない場合には、規定しない。

（理事の行為の差止め）

第31条　監事は、理事がこの法人の目的の範囲外の行為その他法令若しくはこの寄附行為に違反する行為をし、又はこれらの行為をするおそれがある場合において、当該理事の行為によってこの法人に著しい損害が生ずるおそれがあるときは、当該理事に対し、当該行為をやめることを請求することができる。

第６章　評議員会及び評議員

第１節　評議員の選任及び解任等

（評議員の選任）

例１～２共通

☞　評議員の選任・解任の方法は、法令の資格及び構成の要件を満たす限り、学校法人の判断に委ねられている。

☞　理事や監事を兼ねることとなっていないこと。

☞　職員が１人以上は含まれる構成になっていること。

☞　設置する学校を卒業した者で25歳以上の者が１人以上は含まれる構成になっていること（要件を満たす卒業生がいない場合は、改正附則第６項の規定ぶりを参考にすること。）。

☞　職員が評議員の総数の３分の１を超える構成になっていないこと。

☞　職員の地位を退いた後も、評議員の職を失わないこととすることも可能。ただし職員評議員が１人もいなくなることは、私立学校法第62条第３項第１号に違反することに留意する必要がある。

☞　評議員の選任及び解任に関する必要な事項が寄附行為で定められている場合には評議員選任・解任規程を設ける必要はない。

☞　評議員の選任及び解任を評議員会で行う場合には、評議員会の運営方法に則って行うこととなる（決議要件の加重が不可であることなどに留意が必要）。

（例１：評議員会で評議員を選任する場合）

第32条　評議員は、次の各号に掲げる者とし、評議員会において選任する。

(1)　この法人の職員のうちから選任した者 ●名

　(2)　この法人の設置する学校を卒業した者で年齢25年以上のもののうちから選任した者 ●名

　(3)　学識経験者のうちから選任した者　●名

２　前項第１号に定める評議員は、この法人の職員の地位を退いたときは評議員の職を失うものとする。

３　評議員会は、評議員の総数が●名を下回ることとなるときに備えて、補欠の評議員を選任することができる。

４　評議員の選任は、評議員の年齢、性別、職業等に著しい偏りが生じないよう配慮して行うものとする。

５　法令及びこの寄附行為に定めるもののほか、評議員の選任及び解任に関し必要な事項は、評議員選任・解任規程において定める。

（例２：充て職や複数の機関で評議員を選任する場合）

第32条　評議員は、次の各号に掲げる者とする。

(1)　この法人の職員で評議員会において選任した者　●名

　(2)　●●学校校長

　(3)　この法人の設置する学校を卒業した者で年齢25年以上のもののうちから、評議員会において選任した者　●名

(4)　学識経験者のうちから、第４号評議員選任委員会において選任した者　●名

２　前項第１号及び第２号に定める評議員は、この法人の職員の地位を退いたときは評議員の職を失うものとする。

３　第１項第２号に定める評議員は、その職を退いた場合であっても、退任以後最初に招集される定時評議員会の終結の時までは、なお評議員の職を失わないものとする。

４　第４号評議員選任委員会は、学外有識者●名で構成する。

５　評議員会及び第４号評議員選任委員会は、それぞれ、評議員の数が第１項各号に掲げる数を下回ることとなるときに備えて、補欠の評議員を選任することができる。

６　評議員の選任は、評議員の年齢、性別、職業等に著しい偏りが生じないよう配慮して行うものとする。

７　法令及びこの寄附行為に定めるもののほか、評議員の選任及び解任に関し必要な事項は、評議員選任・解任規程において定める。

（１項）

☞　理事又は理事会が選任する評議員が評議員の総数の２分の１を超える構成になっていないこと。なお、充て職評議員の場合は、当該職を選任している者が理事又は理事会であれば、理事又は理事会が選任する評議員に該当することとなる。

☞　●●学校校長を評議員とする場合には、当該校長は理事に選任されていない者である必要がある。

（３項）

☞　その職を退いた場合、評議員の職を失うこととすることも可能。

（評議員の資格）

第33条　評議員の選任に当たっては、私立学校法第31条第３項及び第６項、第46条第２項及び第３項並びに第62条に規定する資格及び構成に関する要件を遵守しなければならない。

（評議員の任期）

第34条　評議員の任期は、選任後６年以内に終了する会計年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時までとする。ただし、任期の満了前に退任した評議員の補欠として選任された評議員の任期は、前任者の残任期間とすることができる。

２　評議員は、再任されることができる。

（１項）

☞　選任後、６年以内の期間であること。

☞「選任後●年以内に終了する会計年度のうち最終のものに関する定時評議員会の終結の時まで」となっていること。「●年間」などの不変期間とすることは不可。

☞「●年」は理事の任期について寄附行為に規定された期間以上であること。

☞　評議員の任期を、選任する機関ごとなどに分けてそれぞれ定めることも可能。　　ただし、選任機関ごとなどに異なる任期となることについて合理的な理由があることや、最も短い評議員の任期が、最も長い理事の任期以上となっている必要がある。

☞　補欠の評議員の任期を前任者の残任期間とする場合には、寄附行為にその旨を規定しておく必要あり。

（評議員の解任及び退任）

第35条　評議員が次の各号のいずれかに該当するときは、当該評議員を選任したものの決議によって解任することができる。

　(1)　職務上の義務に違反し、又は職務を怠ったとき

　(2)　心身の故障のため、職務の執行に支障があり、又はこれに堪えないとき(3)　評議員としてふさわしくない非行があったとき

２　評議員は次の事由によって退任する。

　(1)　任期の満了

　(2)　辞任

(3)　死亡

３　評議員は、第６条に定める定数を下回ることとなったときは、任期の満了又は辞任により退任した後も、後任の評議員が選任されるまでは、なお、評議員としての権利義務を有する。

（１項）

☞　原則として、当該評議員を選任した者が解任することとなっていること。

☞　解任事由を具体的にどのようなものとするかは学校法人の判断であるが、社会通念上合理的かつ適切な内容であることが求められる。

第２節 評議員会及び評議員の職務等

（評議員会の構成）

第36条　評議員会は、全ての評議員で組織する。

（評議員会の職務等）

第37条　評議員会は、この法人の業務若しくは財産の状況又は役員の業務執行の状況について、役員に対して意見を述べ、若しくはその諮問に答え、又は役員から報告を徴することができる。

２　理事会は、次の各号に掲げる事項についての決定をするときは、あらかじめ評議員会の意見を聴かなければならない。

　(1)　重要な資産の処分又は譲受け

　(2)　多額の借財

(3)　予算及び事業計画の作成又は変更

(4)　役員及び評議員に対する報酬等（報酬、賞与その他の職務遂行の対価として受ける財産上の利益及び退職手当をいう。以下同じ。）の支給の基準の策定又は変更

(5)　収益事業に関する重要事項

(6)　私立学校法第23条第１項第１号から第３号まで及び第５号から第15号までに定める事項を除く寄附行為の変更

(7)　予算外の新たな義務の負担又は権利の放棄

(8)　寄附金品の募集に関する事項

(9)　その他この法人の業務に関する重要事項で理事会において必要と認めるもの

３　評議員会は、次の各号に掲げる事項について決議する。

　(1)　私立学校法第23条第１項第１号から第３号まで及び第５号から第15号までに関する寄附行為の変更

　(2)　私立学校法第109条第１項第１号に定める事由による解散

(3)　合併

（２項）

☞　第７号から第９号に掲げる事項について、評議員会の意見を聴かなければならないこととするかどうかは、各学校法人の判断に委ねられている。

☞　各号に掲げる事項については、各学校法人の判断で、評議員会の決議事項とすることも可能。

☞　収益事業を行わない場合には、第５号は規定しない。

（３項）

☞　各号に掲げる事項について、評議員会の決議事項とするかどうかは、各学校法人の判断に委ねられている。ただし、決議事項としない場合は、第２項で規定する意見聴取事項に位置付けることが必要である。

（理事の行為の差止めの求め）

第38条　評議員会は、理事がこの法人の目的の範囲外の行為その他法令若しくはこの寄附行為に違反する行為をし、又はこれらの行為をするおそれがある場合において、当該行為によってこの法人に回復することができない損害が生ずるおそれがあるときは、監事に対し、第31条の請求を行うことを求めることができる。

２　前項の場合において、当該行為によってこの法人に回復することができない損害が生ずるおそれがあるにもかかわらず、評議員会において前項の請求を行うことを監事に求める旨の決議が否決されたとき、又は当該請求を行うことを監事に求める旨の評議員会の決議があった後遅滞なく当該請求その他の手続が行われないときは、評議員は、当該理事に対し、当該行為をやめることを請求することができる。

（責任追及の訴えの求め）

第39条　評議員会は、役員又は清算人が任務を怠ったことによってこの法人に損害が生じた場合には、書面又は電磁的方法により、理事長（理事の責任を追及する場合には監事）に対し、役員又は清算人の責任を追及する訴えの提起を求めることができる。

第３節 評議員会の運営

（開催）

第40条　評議員会は、定時評議員会として毎会計年度終了後３月以内に１回開催するほか、必要がある場合に開催する。

☞　定時評議員会は、原則として４月から６月までの一定の時期に開催すること。

☞　定時評議員会の開催時期を、「毎会計年度終了後３月以内」と規定することも可能。

（招集）

第41条　評議員会は、法令に別段の定めがある場合を除き、理事会の決議に基づき理事長が招集する。

２　評議員の総数の３分の１以上の評議員は、共同して、理事長に対し、評議員会の目的である事項及び招集の理由を示して、評議員会の招集を請求することができる。

３　評議員の総数の３分の１以上の評議員は、共同して、理事長に対し、一定の事項を評議員会の会議の目的とすることを請求することができる。この場合において、その請求は、評議員会の日の20日前までにしなければならない。

４　評議員会を招集する場合には、理事会において、次に掲げる事項を定め、評議員に対し、書面又は電磁的方法（評議員の承諾を得た場合に限る。）により通知しなければならない。

　(1)　会議の日時及び場所

(2)　会議の目的である事項があるときは、当該事項

(3)　会議の目的である事項に係る議案（当該目的である事項が議案となるものを除く。）について、議案が確定しているときはその概要、議案が確定していないときはその旨

(4)　私立学校法施行規則で定める事項

５　前項の通知は、会議の１週間前までに発しなければならない。

（１項）

☞　評議員会の招集方法（誰がどのように招集するのかなど）について明記されていること。

☞　理事が招集することとなっていること。理事が招集することとなっていれば、具体的な招集方法は各学校法人の判断に委ねられている。

☞　理事長以外の理事を招集担当権者とすることも可能。

（２項）

☞　３分の１を下回る割合とすることも可能。

☞　理事長以外の理事を評議員会の招集担当理事とする場合には、当該理事に対して招集を求めることとされていること。

（３項）

☞　３分の１を下回る割合とすることも可能。

☞　20日を下回る期間とすることも可能。

☞　理事長以外の理事を評議員会の招集担当理事とする場合には、当該理事に対して請求することとされていること。

（５項）

☞　例外的な事由がある場合（「やむを得ない場合」や「緊急を要する場合」）でも、期間の短縮は不可能。

☞　評議員の全員の同意があるときは、招集の手続きを経ることなく開催することができる。

（評議員による招集）

第42条　前条第２項の規定による請求があった日から20日以内の日を評議員会の日とする評議員会の招集の通知が発せられない場合には、同項の規定による請求をした評議員は、共同して、香川県知事の許可を得て、評議員会を招集することができる。

２　前項の評議員は、その全員の協議により、前条第４項各号に掲げる事項を定め、他の評議員に対し、書面又は電磁的方法（他の評議員の承諾を得た場合に限る。）により通知しなければならない。

３　前項の通知は、会議の１週間前までに発しなければならない。

（１項）

☞「20日以内」との期限は、法律で規定されている事項であるため、変更することは　　不可能。

（監事による招集）

第43条　第29条第２項の規定により監事が評議員会を招集する場合には、監事は第41条第４項第１号、第２号及び第４号に掲げる事項を定め、評議員に対し、書面又は電磁的方法（評議員の承諾を得た場合に限る。）により通知しなければならない。

２　前項の通知は、会議の１週間前までに発しなければならない。

（招集手続の省略）

第44条　前３条の規定にかかわらず、評議員会は、評議員の全員の合意があるときは、招集の手続を経ることなく開催することができる。

（運営）

第45条　評議員会に議長を置き、評議員の互選によって定める。

☞　評議員会の議長の選任方法等については、各学校法人の判断に委ねられている。ただし、評議員の議長は評議員のうちから選定されることが通常であると考えられる。

（決議）

第46条　評議員会の決議は、決議について特別の利害関係を有する評議員を除く評議員の過半数が出席し、その過半数をもって行う。

２　前項の規定にかかわらず、次の決議は、議決に加わることができる評議員の数の３分の２以上に当たる多数をもって行わなければならない。

(1)　監事の解任

　(2)　私立学校法第92条第１項に規定する決議

３　前２項の規定にかかわらず、役員が任務を怠ったことによって生じた損害についてこの法人に対し賠償する責任を免除する決議は、議決に加わることができる評議員の全員一致をもって行わなければならない。

４　評議員は、書面又は電磁的方法により評議員会の議決に加わることができる。

（１～３項）

☞　評議員会の決議要件は、法令の要件を加重又は軽減できない。

（４項）

☞　書面やメール等による意思表示を認める場合には、寄附行為にその旨を規定しておく必要あり。

☞　書面開催は不可。

（議事録）

第47条　評議員会の議事については、法令で定めるところにより、議事録を作成しなければならない。

２　議事録には、出席した評議員及び監事が署名又は記名押印し、評議員会の日から10年間、これを事務所に備えて置かなければならない。

（２項）

☞　議事録の署名担当者を定め、以下のように規定することも可能。

　　議事録には、議長、出席した評議員のうちから互選された評議員２人以上及び出席した監事が署名又は記名押印し、評議員会の日から10年間、これを事務所に備えて置かなければならない。

（役員の出席等）

第48条　理事長 、代表業務執行理事、業務執行理事 及び監事は、評議員会に出席しなければならない。

２　理事長 、代表業務執行理事、業務執行理事 及び監事は、評議員会において、評議員から特定の事項について説明を求められた場合には、当該事項について必要な説明をしなければならない。

（１項及び２項）

☞　代表業務執行理事及び業務執行理事を置かない場合には、〔 〕内は規定しない。

第７章 理事会と評議員会の協議

（理事会及び評議員会の協議）

例１～２共通（１項）

☞　理事会と評議員会の決議が分かれた場合の取り扱いについて規定するかどうかは学校法人の判断に委ねられているが、業務の円滑な推進のためにも積極的に検討を行うこと。理事会の決議及び評議員会の決議の両方を必要とする事項がない場合においては、規定する必要はない。

☞　ただし、一定の手続により理事会又は評議員会の決議があったものとみなすなどいずれかの決議を不要とするような規定は設けられず、いずれにせよ理事会の決議、評議員会の決議が必要であることに留意すること。

（例１：理事・評議員協議会を設置する場合）

第49条　法令又はこの寄附行為の定めるところにより理事会の決議及び評議員会の決議を必要とする事項について理事会と評議員会の決議が異なる場合、理事会又は評議員会は、理事長に対し、理事・評議員協議会の開催を求めることができる。この場合において、理事長は、求めのあった日から20日以内に、理事・評議員協議会を招集しなければならない。

２　理事・評議員協議会の構成員は、理事●名、評議員●名とし、それぞれ理事会及び評議員会において選定する。

３　理事・評議員協議会の構成員は、理事・評議員協議会に出席し、誠実に協議を行わなければならない。

４ 理事・評議員協議会の決議は、理事・評議員協議会の構成員の過半数が出席し、その過半数をもって行う。

５ 理事会又は評議員会は、理事・評議員協議会の決議の結果を十分に尊重して、再度決議を行わなければならない。

６ 理事・評議員協議会の運営に関し必要な事項は、理事・評議員協議会運営規程において定める。

（４項）

☞　理事・評議員協議会の決議要件は、加重することも可能。

（例２：理事会が丁寧に説明し、再度評議員会で決議する場合）

第49条　法令又はこの寄附行為の定めるところにより理事会の決議及び評議員会の決議を必要とする事項について理事会と評議員会の決議が異なる場合、理事長は、更に審議を尽くすために、当該事項を会議の目的である事項として、再度評議員会を招集することができる。

２　全ての理事は、前項の評議員会に出席し、前項の事項に関し改めて必要な説明を行うものとする。

３　評議員会は、前項の理事の説明を十分に尊重して、再度決議を行わなければならない。

第８章 予算及び事業計画等

（会計年度）

第50条　この法人の会計年度は、４月１日に始まり、翌年３月31日に終わるものとする。

（予算及び事業計画）

第51条　この法人の予算及び事業計画は、毎会計年度開始前に、理事長が編成し、理事会で決議しなければならない。これに変更を加えようとするときも、同様とする。

☞　予算及び事業計画の作成及び変更は、理事会の決議事項であり、特定の理事に委任等することは不可。

（役員及び評議員の報酬）

第52条　役員及び評議員に対して、別に定める報酬等の支給の基準に従って算定した額を報酬等として支給することができる。

（責任の免除）

第53条　役員が任務を怠ったことによって生じた損害についてこの法人に対し賠償する責任は、職務を行うにつき善意でかつ重大な過失がなく、その原因や職務執行状況などの事情を勘案して特に必要と認める場合には、役員が賠償の責任を負う額から私立学校法第92条の規定に基づく最低責任限度額を控除して得た額を限度として理事会の決議によって免除することができる。

２　理事は、前項の規定に基づく責任の免除（理事の責任の免除に限る。）に関する議案を理事会に提出するには、各監事の同意を得なければならない。

３　第１項の決議を行ったときは、理事長は、遅滞なく、私立学校法第92条第２項各号に掲げる事項及び責任を免除することに異議がある場合には●月以内に当該異議を述べるべき旨を評議員に通知しなければならない。

４　評議員の総数の10分の１以上の評議員が前項の期間内に同項の異議を述べたときは、第１項の規定に基づく責任の免除をしてはならない。

５　第１項の決議があった場合において、当該決議後に同項の役員に対し退職慰労金その他の私立学校法施行規則で定める財産上の利益を与えるときは、評議員会の決議による承認を受けなければならない。

（１項）

☞　理事会の決議による役員の責任の一部免除を行う場合には、寄附行為にその旨を規定しておく必要あり。

（３項）

☞　異議申述期間は、１か月以上の期間としなければならない。

（４項）

☞　10分の１を下回る割合とすることも可能。

（責任限定契約）

第54条　理事（理事長、代表業務執行理事、業務執行理事及びこの法人の職員である理事を除く。以下この条において「非業務執行理事」という。）又は監事が任務を怠ったことによって生じた損害についてこの法人に対し賠償する責任は、当該非業務執行理事又は監事が職務を行うにつき善意でかつ重大な過失がないときは、金●万円以上であらかじめ定めた額と私立学校法第92条の規定に基づく最低責任限度額とのいずれか高い額を限度とする旨の契約を非業務執行理事又は監事と締結することができる。

☞　役員と責任限定契約を締結する場合には、寄附行為にその旨を規定しておく必要あり。

☞　規定する場合には、役員との個別の契約の際に設定することができる額の範囲を定めておく必要あり。

第９章 資産及び会計

（資産）

第55条　この法人の資産は、財産目録記載のとおりとする。

（資産の区分）

第56条　この法人の資産は、これを分けて基本財産、運用財産〔及び収益事業用財産〕とする。

２　基本財産は、この法人の設置する学校に必要な施設及び設備又はこれらに要する資金とし、財産目録中基本財産の部に記載する財産及び将来基本財産に編入された財産とする。

３　運用財産は、この法人の設置する学校の経営に必要な財産とし、財産目録中運用財産の部に記載する財産及び将来運用財産に編入された財産とする。

４　収益事業用財産は、この法人の収益を目的とする事業に必要な財産とし、財産目録中収益事業用財産の部に記載する財産及び将来収益事業用財産に編入された財産とする。

５　寄附金品については、寄附者の指定がある場合には、その指定に従って基本財産、運用財産〔又は収益事業用財産〕に編入する。

（１項及び５項）

☞　収益事業を行わない場合には、〔 〕内は規定しない。

（４項）

☞　収益事業を行わない場合には、規定しない。

（基本財産の処分の制限）

第57条　基本財産は、これを処分してはならない。ただし、この法人の事業の遂行上やむを得ない理由があるときは、理事会の決議によって、その一部に限り処分することができる。

（積立金の保管）

第58条　基本財産及び運用財産中の積立金は、確実な有価証券を購入し、又は確実な信託銀行に信託し、又は確実な銀行に定期預金とし、若しくは定額郵便貯金として理事長が保管する。

☞　「確実な」の意味は、学校における安定的・継続的な教育活動に資するべく運用の安全性が相当程度期待される旨の趣旨であり、学校法人の資産運用に関しては責任ある意思決定及び管理体制の整備について各学校法人で検討すること。

（経費の支弁）

第59条　この法人の設置する学校の経営に要する費用は、基本財産並びに運用財産中の不動産及び積立金から生ずる果実、授業料収入、入学金収入、検定料収入その他の運用財産をもって支弁する。

（会計）

第60条　この法人の会計は、学校法人会計基準により行う。

２　この法人の会計は、学校の経営に関する会計（以下「学校会計」という。）及び収益事業に関する会計（以下「収益事業会計」という。）に区分するものとする。

（２項）

☞　収益事業を行わない場合には、規定しない。

（予算外の新たな義務の負担又は権利の放棄）

第61条　予算をもって定めるものを除くほか、新たに義務の負担をし、又は権利の放棄をしようとするときは、理事会で決議しなければならない。借入金（当該会計年度内の収入をもって償還する一時の借入金を除く。）についても、同様とする。

☞　基本財産の処分や借入金、その他予算外における新たな義務の負担又は権利の放棄は、理事会の決議事項であり、特定の理事に委任等することは不可。

（事業報告及び決算）

第62条　この法人の事業報告及び決算については、毎会計年度終了後、理事長が次の書類を作成し、監事の監査を受けた上で、理事会の承認を受けなければならない。

　(1)　事業報告

(2)　事業報告の附属明細書

(3)　計算書類

(4)　計算書類の附属明細書

(5)　財産目録

２　理事長は、前項の承認を受けた書類のうち、第１号、第３号及び第５号の書類の内容を定時評議員会に報告し、その意見を聴かなければならない。

３　収益事業会計の決算上生じた利益金は、その一部又は全部を学校会計に繰り入れなければならない。

（１項）

☞　理事長以外の者が作成することも可能。

（２項）

☞　理事長以外の者が報告することも可能。

（３項）

☞　収益事業を行わない場合には、規定しない。

（財産目録等の備置き及び閲覧等）

第63条　この法人は、毎会計年度終了後３月以内に役員等名簿（役員及び評議員の氏名及び住所を記載した名簿をいう。以下第３項及び第69条第２号において同じ。）を作成しなければならない。

２　この法人は、前条第１項各号及び前項の書類、監査報告、役員及び評議員に対する報酬等の支給の基準を記載した書類並びにこの寄附行為を事務所に備えて置き、請求があった場合には、正当な理由がある場合を除いて、これを閲覧に供し又はこれらの書類の謄本若しくは抄本を交付しなければならない。

３　前項の規定にかかわらず、この法人は、役員等名簿について評議員以外の者から同項の請求があった場合には、役員等名簿に記載された事項中、個人の住所に係る記載の部分を除外して、同項の閲覧をさせ又は交付をすることができる。

（２項）

☞　閲覧・交付については、評議員、設置する学校に在学する者その他の利害関係人からの請求に対応することで足りる。

（資産総額の変更登記）

第64条　この法人の資産総額の変更は、毎会計年度末の現在により、会計年度終了後３月以内に登記しなければならない。

第10章 寄附行為の変更

（寄附行為の変更）

（例１：寄附行為変更に評議員会の決議を必要とする場合）

第65条　この寄附行為を変更しようとするときは、理事会の決議及び評議員会の決議（私立学校法第23条第１項第１号から第３号まで及び第５号から第15号に定める事項を除く寄附行為の変更にあっては、評議員会への諮問。次項において同じ。）を得て、香川県知事の認可を受けなければならない。

２　前項の規定にかかわらず、私立学校法施行規則に定める届出事項については、理事会の決議及び評議員会の決議を得て、香川県知事に届け出なければならない。

（１項）

☞　括弧書きにおいて除く私立学校法第23条の規定は、第37条第２項第６号において規定した内容と同じ内容とすること。

（例２：寄附行為変更に評議員会の決議を必要としない場合）

第65条　この寄附行為を変更しようとするときは、あらかじめ評議員会の意見を聴き、理事会の決議を得て、香川県知事の認可を受けなければならない。

２　前項の規定にかかわらず、私立学校法施行規則に定める届出事項については、あらかじめ評議員会の意見を聴き、理事会の決議を得て、香川県知事に届け出なければならない。

第11章 解散及び合併

（解散）

例１～２共通（１項）

☞　解散事由として、法律で規定されたもの以外の事由による解散を可能とする場合には、寄附行為にその旨を規定しておく必要あり。

（例１：解散に評議員会の決議を必要とする場合）

第66条　この法人は、次の各号に掲げる事由によって解散する。

(1)　理事会の決議及び評議員会の決議による決定

　(2)　この法人の目的たる事業の成功の不能

(3)　合併

(4)　破産手続開始の決定

(5)　香川県知事の解散命令

２　前項第１号又は第２号に掲げる事由による解散は、香川県知事の認可を受けなければならない。

（例２：解散に評議員会の決議を必要としない場合）

第66条　この法人は、次の各号に掲げる事由によって解散する。

(1)　理事会の決議による決定

　(2)　この法人の目的たる事業の成功の不能

(3)　合併

(4)　破産手続開始の決定

(5)　香川県知事の解散命令

２　理事会は、前項第１号の決議をするときは、あらかじめ、評議員会の意見を聴かなければならない。

３　第１項第１号又は第２号に掲げる事由による解散は、香川県知事の認可を受けなければならない。

（残余財産の帰属者）

第67条　この法人が解散した場合（合併又は破産手続開始の決定によって解散した場合を除く。）における残余財産は、解散のときにおける理事会の決議により選定した学校法人又は教育の事業を行う公益社団法人若しくは公益財団法人に帰属する。

☞　残余財産の帰属者を定める場合には、寄附行為にその旨を規定しておく必要あり。

（合併）

（例１：合併に評議員会の決議を必要とする場合）

第68条　この法人が合併しようとするときは、理事会の決議及び評議員会の決議を得て、香川県知事の認可を受けなければならない。

（例２：合併に評議員会の決議を必要としない場合）

第68条　この法人が合併しようとするときは、あらかじめ評議員会の意見を聴き、理事会の決議を得て、香川県知事の認可を受けなければならない。

第12章 補則

（情報の公表）

第69条　この法人は、次の各号に掲げる場合の区分に応じ、遅滞なく、インターネットの利用により、当該各号に定める事項を公表しなければならない。

(1)　寄附行為若しくは寄附行為変更の認可を受けたとき、又は寄附行為変更の届出をしたとき 寄附行為の内容

(2)　計算書類及び事業報告書並びにこれらの附属明細書、監査報告、財産目録、役員等名簿並びに役員及び評議員に対する報酬等の支給の基準を記載した書類を作成したとき これらの書類の内容

☞　本条に規定する情報の公表については、私立学校法上は努力義務であるが、積極的に検討を行うこと。

（公告の方法）

第70条　この法人の公告は、この法人のホームページに掲載する方法により行う。

☞　設置する学校の掲示場に掲載する方法によることも可能。

（施行細則）

第71条　この寄附行為の施行についての細則その他この法人及びこの法人の設置する学校の管

理及び運営に関し必要な事項は、理事会が定める。

**※これまでの附則は削除しないこと**

附 則

１　この寄附行為は香川県知事の認可の日（○年○月○日）から施行する。

２　この法人の設立当初の役員（及び評議員）は、次のとおりとする。

　理事（理事長）○○○○

理事 ○○○○

理事 ○○○○

： ：

監事 　 ○○○○

監事 　 ○○○○

評議員　　　　○○○○

評議員　　　　○○○○

：　　　　　　　：

３　第32条第１項第２号〔第３号〕中「設置する学校を卒業した者」とあるのは、学校の卒業生が年齢25年以上になるまでの間、「園児児童生徒の父母」と読み替える。

**※今回の改正に伴い、以下の附則を追記すること**

１　この寄附行為は令和７年４月１日から施行する。

（理事と評議員を兼任する者がいずれかの職を辞任する場合の、経過措置の例）

２　この寄附行為の施行の際現に在任する役員及び評議員の定数、資格及び構成については、令和７年度の定時評議員会の終結の時までは、なお従前の例による。この場合において、評議員のうちから、この寄附行為の定めるところにより選任された理事については、当該終結の時に、この法人と協議の上、理事又は評議員のいずれかを辞任しなければならない。

☞　兼職者に関する整理については、例えば、全員が理事を辞任する、全員が評議員を辞任するなど、兼職を解消する方法の具体的内容については学校法人の判断に委ねられている。

（令和７年４月１日よりも前に任期が満了する役員又は評議員の任期を、令和７年度の定時評議員会の終結の時まで伸長する場合の例）

１　この寄附行為は令和７年４月１日から施行する。ただし、附則第２項の規定は、令和■年■月■日から施行する。

２　令和▲年▲月▲日に在任する役員又は評議員であって、令和７年度の定時評議員会の日よりも前に任期が満了するものの任期については、その終期を令和７年度の定時評議員会の終結の時まで伸長する。

（令和７年４月１日以降令和７年度の定時評議員会の終結の時までに任期が満了する役員又は評議員について、令和７年度の定時評議員会の終結の時まで任期を伸長する場合の、経過措置の例）

３　この寄附行為の施行の際現に在任する役員又は評議員であって、令和７年度の定時評議員会の日よりも前に任期が満了するものの任期については、その終期を令和７年度の定時評議員会の終結の時まで伸長する。

（改正法の資格及び構成の要件を満たす役員又は評議員の任期の終期について、任期の満了まで又は令和９年度の定時評議員会の終結の時までとする場合の、経過措置の例）

４　この寄附行為の施行の際現に在任する役員又は評議員であって、私立学校法第31条、第46条及び第62条の資格及び構成を満たすものの任期は、残任期間と同一の期間とする。ただし、当該期間の満了の時が令和９年度の定時評議員会の終結の時以後である場合は、当該終結の時までとする。

（前項の理事又は評議員について、解任手続を従来の方法によることとする場合の、経過措置の例）

５　前項の理事又は評議員の解任は、なお従前の例による。

（私立学校法第62条第３項第２号の要件を満たす卒業生がいない場合において、必要に応じて規定する。）

６　第32条第１項第２号〔第３号〕中「設置する学校を卒業した者」とあるのは、学校の卒業生が年齢25年以上になるまでの間、「園児児童生徒の父母」と読み替える。